

文・献・抄・録

脳卒中；そのリハビリテーションの歴史

Stroke: A History of Its Rehabilitation/Licht, S.: Arch. Phys. Med. & Rehabil., 54, 10-18, 1973.

【脳卒中，歴史，将来の展望】

この論文は，1972年の American Academy of Physical Medicine & Rehabilitation で W.J. Zeiter を記念して行われた講演である。Licht は，Zeiter について紹介をした後に，Apoplexy の語源から，脳卒中のリハの最初の報告に至るまでの歴史をのべている。つづいて，彼は運動，治療における反射，電気，外科的治療，血管外科，薬物療法，言語のそれぞれについてその歴史を語り，最後に将来という項を設け，Licht 自身の卒中のリハに対する今後のあり方を示唆している。各項目の中では，運動と，治療における反射について多くのスペースが割かれ，彼自身の興味を示しているとともに，卒中のリハの歴史の知られざる一面を紹介している。さらに興味深い点は，将来の項で，種々な方法論について期待をのべているが，内科や神経科にてほとんどの卒中患者が一応リハビリテートされてはいるが，Formal Rehabilitation Service によってより大きな成果が得られるとのべている。（横浜市大 大川 嗣雄）

カテーテル留置者の間欠式カテーテル法

Intermittent Catheterization in Patients Previously on Indwelling Catheter Drainage/Stov r, S.L. & Miller, J.M.: Arch. Phys. Med. & Rehabil., 54, 25-30, 1973.

【膀胱，カテーテル，脊損】

脊損患者のカテーテル留置法は，膀胱粘膜下出血や充血・浮腫・感染・粘膜慢性器質的变化を起こしやすく，リハビリの障害因子となりうるが，著者らは，カテ留置者の減少に，間欠導尿法が有効であることを経験し，分析した。完全脊損30例，不全型3例（内30例追求）において，間欠導尿法実施により，22例（73.3%）がカテ留置不要，内17例（56.7%）は全くカテ不要，5例（16.6%）は家庭で自分で間欠導尿施行となった。8例（26.7%）はカテ留置のままで失敗であった。Credè 法にて排尿後，無菌の間欠導尿が7 a.m., 12 noon, 5 p.m., 7 p.m. の4回施行された。残尿量150 cc 以下の際，導尿回数は減少され，中止の方向へもっていかれた。カテ不要となった17例の以前のカテ留置期間は平均19W。カテ必要

群13例の以前のカテ留置期間は平均37Wであり，留置期間は短いほど，成功率が高かった。また成功例17例の間欠導尿必要期間は3W-7 $\frac{1}{2}$ Wであった。この期間中の発熱悪寒合併発生率は，カテ留置時に比し低く，間欠導尿の危険は少なかった。防腐剤馬尿酸メテナミン1g，痙性膀胱にはメカミラミンが投与された。

（国立名古屋病院 伊藤 不二夫）

ダントロレンソディウムによる痙性の治療

Dantrolene Sodium in the Treatment of Spasticity/Basmajian, J. V. et al.: Arch. Phys. Med. & Rehabil., 54, 60-64, 1973.

【筋弛緩剤，痙性，膝蓋腱反射】

この2～3年アメリカで盛んに用いられている抗痙性剤である Dantrolene Sodium に関する報告である。彼らは23人の痙性を持った患者（14人の多発硬化症，5人の脊損，2人のCVA，その他2人）に二重盲検法により薬の効果を判定した。効果判定の基準として，膝蓋腱反射と，大腿四頭筋からの筋電図を，特別に考案した装置によりデータとして集め，コンピューターによって分析している。その結果，23例中15例に膝蓋腱反射の低下がおこったが，筋電図の結果には一定のものがなかったとのべている。以上のことから，Dantrolene Sodium は痙性の軽減に効果があり，作用機序は神経筋接合部ではなく，筋せんい内に働いていると説明している。また副作用としては，肝，腎には何ら影響を及ぼさないが，筋力低下，めまいがおこることを報告している。

（横浜市大 大川 嗣雄）

パーキンソニズム：感覚刺激による運動促進

Parkinsonism: Facilitation of Motion by Sensory Stimulation/Stefaniwsky, L. & Bilowit, D.S.: Arch. Phys. Med. & Rehabil., 54, 75-77, 1973.

【パーキンソン病，促進】

パーキンソニズムにおいて，感覚刺激が運動にいかなる影響を与えるかを検討するため，本症患者10名と正常者5名とを対象に，感覚刺激として，光（視覚），click（聴覚），staut（大声，聴覚），肩への軽い指圧（触覚）の4種を用い，運動としては，右肘関節の0°～90°の屈曲と，-90°～0°の伸展を用い，刺激より運動開始までの所要時間（Ⅰ）と，運動完了までの所要時間（Ⅱ）

を、この研究用に特に設計された装置により記録した。全員に同じ刺激を用いて3週間の理学療法を行った後に、再び測定を行った。訓練前にはいずれの刺激方法でも、正常者がⅠ・Ⅱの所要時間は短いが、訓練後は、患者と正常者の差が少なくなっている。患者群の訓練前後を比較してみると、訓練後には、Ⅰ・Ⅱとも短縮され、特に、刺激から運動開始まで時間が短縮された。歩容、言語とも改善をみ、車いすを使用していた2名のうち1名は歩行可能となった。

(こども医療センター 陣内 一保)

骨肉腫

Osteogenic Sarcoma/ Moore, G.E. et al.: Surg. Gynec. Obst., **136**, 359-366, 1973.

【骨肉腫, Paget 氏病】

アメリカ合衆国では約200名が悪性の骨腫瘍で毎年死亡しており、そのうち60%が骨肉腫である。この論文は100例の骨肉腫について調査をしている。年齢の中間値は28歳であるが、大多数は思春期のはじめに発病したもので、85%の患者は腫瘍部の腫脹や疼痛に気づいている。多分これは局所の骨腫のひびきにより生じた痛みだろう。わずか3%が腫瘍部の骨折が最初の症状で、ごくわずかの例が転位部に最初気づいている。3名にPaget 氏病があり、外傷は直接、間接を含め33%にある。興味のあるのは5名に先天性奇型があったことである。15%の患者は最初の診察でX線写真を撮されておらず、発症と確定診断の期間は中間値は2カ月である。X線診断は70%以上が正確である。72名に手術または放射線治療が行なわれ、手術のみ65名中8名、放射線治療を手術5名中1名、手術と化学療法6名中2名合計11名が5年後生存している。また immunotherapy の効果についても述べている。

(岡山大 明石 謙)

pneumatic 義足の経験

Experience with a pneumatic lower-limb prosthesis/Little, J. M. et al.: Med. J. Australia, **59**, 1300-1302, 1972.

【プラスチックソケット, 義足】

pneumatic prosthesis は大腿または下腿切断に用いられ、プラスチック製の pneumatic socket, 硬いアルミニウムのわく, SACH foot よりできている。術直後

義肢装着法は大変有用な方法ではあるが、広く一般に用いられない理由として硬いギブスソケットを作ること、常にセラピストや医師の注意深い観察がその必要条件となっていることだろう。pneumatic socket はそれを用いることに関してはそれほど多くの練習を必要としない。著者らは患者を2群に分けこのソケットを使用し、術直後義肢装着法の群は32名、そのうち2名は別の理由で死亡、3名は全身状態や精神状態で続けられなくなり、1名は脳卒中を併発した。残り26名については成功した。一時的な義肢装着群は24名でその中で1名のみが肥満と膝関節変形のため pneumatic socket は使用できなかった。結果として85%の患者が現在義肢を使用している。

(岡山大 明石 謙)

大腿骨頭置換術の遠隔成績

Long-term results of femoral-head replacement/Salvati, E.A. & Wilson, P.D., Jr.: J. B. J. S., **55-A**, 516-524, 1973.

【Austin-Moore, 人工骨頭, Thompson】

New York の Hospital for Special Surgery (整形外科特別病院) では1950年10月から1965年7月までに436例の大腿骨頭置換手術を行ったが、その遠隔成績を調べたものである。418名の対象患者に436の手術を行ったが、人工骨頭として用いたのは Judet 型 40, Vall 型 (Vitalium 製) 120, Thompson 型 25, Austin Moore 型 251 であった。Judet 型は1954年以後用いられていない。手術の対象となった疾患は新鮮大腿骨骨折46, 外傷合併症として165, 変形性股関節症148, リウマチ様関節炎31, 人工骨頭挿入失敗例20, 特発性無腐性骨頭壊死19, 強直性脊椎炎4, その他3であった。人工骨頭は疾患の種類により特に指定はしなかった。195例を5年以上追跡し、その結果を評価表に従って判定した。一般にリウマチ様関節炎における結果は良くなかった。Austin Moore 型が一番良く用いられたが、それでも優31%, 良36%, 可25%, 不可8%という結果であった。

(自治医大 大井 淑雄)

無知覚の足におけるサイム切断

Syme's amputation in insensitive feet/Srinivasan, H.: J. B. J. S., **55-A**, 558-562, 1973.

【Syme 切断, 無知覚, 癩】

文・献・抄・録

Syme 切断が知覚が無い下肢に行われた場合果してどのように有効かどうかを判定する目的で、インドの癱疾患研究所が1962年から1971年までの間に切断した患者について調査を行った。患者は2名で男19、女5で、1例には両側行ったので手術件数は25件である。20名の患者について予後調査を行い得たが、彼らはすべて術前は足の潰瘍と保護のためにマイクロラバーの敷物の入った大きな靴を使用していた。切断の手技は標準の方法で行われ2～9年追跡したが、義肢としては全員“elephant boots”と称するものを着用していた。3名のSymeの切断と関係のない原因による失敗例は除き、残りの全員は機能時に何の問題もなく、日常生活に従事していた。切断端が無感覚であるために体重負荷により皮膚の破損や褥創の発生が心配されるが、適切な切断端の愛護と手入れにより問題はあまり生じないことがわかった。elephant bootとは図からは足指のない形の丸いheelのみを持つ形の靴のようである。（自治医大 大井 淑雄）

上肢の後天性痙性片麻痺の治療におけるフェノールブロック

Phenol nerve block in the treatment of acquired spastic hemiplegia in the upper limb/Braun, R.M. et al.: J.B.J.S., 55-A, 580-585, 1973.

【フェノールブロック、片麻痺、痙性】

痙性麻痺の治療にフェノールを神経幹へ注入する方法は良く知られているが、著者らは1965年から1971年にかけて上肢について成人24名、小人10名の成績をまとめた。注入法は手術により神経を露出する open phenol block で該当運動神経へ3-5%のフェノール液を2-5ml注入した。以前23名について報告した際には全員有効であったが、効果持続期間は平均6カ月以下であった。今回の34名についてはフェノールの注入を行うとともに、上肢において尺側手根屈筋を短橈側手根伸筋に移行するとかギプス固定も含め理学療法を入念に行った。その結果フェノール注入自体が有効であることが知られると同時に、他のさらに行うべき治療に対しても役立つことがわかった。痙性の程度は重度、中等度、軽度とし正中神経、尺骨神経、筋皮神経などが選ばれた。知覚異常、シビレなどのようなこの注射に合併することが予測される合併症は今回のシリーズでは1例もなかった。

（自治医大 大井 淑雄）

軽症片麻痺に見られる小指徴候

The digiti quinti sign of mild hemiparesis/Alter, M.: Neurol., 23, 503-505, 1973.

【小指徴候、片麻痺、Souqueの徴候】

軽微な片麻痺がある例で、手のひらを下に向けて腕および手指を伸展するように命じると麻痺側の小指が軽度以外転して薬指との間にすきまができる。この臨床徴候は今まで記載されていない現象である。もし、すきまが両側で見られた場合は意味をつけないことにする。両側に見られた場合に検者が患者の指をかるく握ってすきまがなくなるようにし、次いで手を放すと麻痺側だけが再び外転するという形でこの現象が認められる場合もある。片麻痺の場合に指に現れる徴候としては、麻痺側のすべての指に外転の見られるSouqueの徴候がある。小指徴候はSouqueの徴候の軽微なものに相当すると思われる。ワルテンベルクは固い物体の上においた手で力一杯押し下げを試みると指の離開が起ることを認め、これを小脳症状の1つと解釈している。しかしこのような患者では小指徴候以外に障害側では過伸展によるへこみを観察することで区別できる。小指徴候の成立のメカニズムとしてはこの指が拇指や示指に比べて皮質からの支配が弱いためにかかる中枢性麻痺後にも異常を示しやすいと考えられる。（中央鉄道病院 土肥 一郎）

視覚性無視症状のシンプル・テスト

A simple test of visual neglect/Albert, M.L.: Neurol., 23, 658-664, 1973.

【視覚性無視、テスト法】

テスト法：20×26cmの白紙に各2.5cmの直線を40本、被験者の見ている前で一見不規則に赤鉛筆で描く。実はこれらの線は6本ずつの行が6行と4本の行が1行からなっており、左右に6本の行が2行ずつ、中央には4本の行をはさんで両側に6本の行が1行ずつあるように配置されている。被験者は鉛筆でこれらの線をすべてクロス・アウトするように命じられる。クロスが残した線の数で無視を判定する。

結果：左半球損傷（LBD）36例、右半球損傷（RBD）30例（いずれも外科的に確認）、対照30例について施行した結果、次のことがわかった。1）無視の起る率はLBD 30%、RBD 37%で有意ではない。2）無視の程度はRBDに有意に高い（平均エラーはRBD 4.77に対

し LBD 0.72), 同半球内では前方部よりも後方部の損傷に高い。3) 無視は損傷側の反対の視野に起るとは限らず、左右・中央の全視野にひろくみられた。4) 視野欠損眼球運動障害とは必ずしも関係しない。5) 無視と構成失行とは脳損傷部位に関係なく関連性が高く、無視と着衣失行は RBD において関連性が高かった。

(東大 上田 敏)

脳損傷における言語障害の鑑別

Differential language and neurologic characteristics in cerebral involvement/Halpern, H. et al.: J. of Speech and Hearing Disorders, 38, 162-173, 1973.

【鑑別, 失語症, 発語失行, 精神障害】

各種脳損傷に起因する言語障害, 特に失語症を, 痴呆その他の精神障害と鑑別することは必ずしも容易ではない。Halpern らの研究は, こうした問題への1つのアプローチを示したものとして参考になろう。

Mayo Clinic において, 失語症, 発語失行, 全般的知能障害 (general intellectual impairment), 錯乱性言語 (confused language) の各々に診断された症例各10例, 合計40例のカルテを資料とし, 言語検査の結果と神経学的所見との分析を通して, 各臨床群の障害パターンの特徴を明らかにしたものである。その結果, 失語症群の特徴を示す言語症状は, “聴覚的把持”と“発話の流暢性”の障害であり, 9/10例が左半球の後方領域の硬塞ないし腫瘍によるものであった。これに対して発語失行群では, “発話の流暢性”に顕著な障害を示し, 左半球前方領域の硬塞に起因する傾向がみられた。全般的知能障害群の言語症状は, “読解”と“聴覚的把持”の障害を主とし, 変性疾患による瀰漫性の損傷に起因するものが多く, 症状の発現が緩慢で存続期間が長びく傾向を示した。錯乱性言語群では, “読解”, “書取”, “反応の適切性”の各々に明らかな障害が認められ, 外傷による散在性または瀰漫性の損傷に起因し, 症状の発現と消失が急激なことを特徴とした。すべての臨床群に共通した言語症状として, “聴覚的理解”, “呼称”, “計算”, “統語機能”, “反応の正確性”の各側面に障害が認められたことは鑑別上注目すべきであろう。

(都老人総合研究所 笹沼 澄子)

慢性関節リウマチの金療法対照試験

A controlled trial of gold salt therapy in rheumatoid

arthritis/The Cooperating Clinics Committee of the American Rheumatism Association: Arth. & Rheum., 16, 353-358, 1973.

【RA, 金療法, 二重盲検法, 短期, 長期】

罹病期間6カ月以上の definite RA で, 試験開始前2カ月間にクロロキン, フェニルブタゾン, インドメサシン, 副腎皮質ホルモン (関注, 経口) を使用していないものを対象にチオマレート金塩ないし Placebo (溶媒のみ) を, Phase 1 として6カ月, Phase 2 としてそれ以降18カ月用い, Phase 1 終了時に検者に未知のまま, Phase 1 で金塩使用者をさらに金塩群と Placebo 群にわけ, 一方 Phase 1 で Placebo だったものはそのまま Phase 2 へ進めた。投与法は第1週10 mg, 第2週15 mg, 第3週25 mg, それ以降は50 mg, で27週までつづけ, それ以降は2週に1回50 mg を6回, 3週に1回50 mg を6回, 以後4週に1回50 mg とした。Phase 1 は27週までとし, 金総量1100 mg である。患者の検査は試験前1週, スタート時, 以後 Phase 1 では4週毎, Phase 2 では第1年目は3週毎, 第2年目は4週毎とした。Phase 1 では金群36例中14例脱落 (副作用12, 無効1, 転居1), 対照群で32例中11例脱落 (副作用2, 無効8, 転居1) で, 朝のこわばり, 握力, 活動性関節数, 50フィート歩行時間, 血沈についてみると, 両群とも改善がみられ, 血沈以外は有意差がなかった。ただし, 医師の印象を very good, good, fair, poor, very poor にわけて, Phase 1 での7回の評価をまとめてみると very good ないし good のものが有意に金群に多くみられた。手のレ線写真では金群で悪化3/20例, 対照群で9/19であった ($P=0.06$)。Phase 2 では金群10名, 対照群10名のうちそれぞれ4名の脱落例があり, 各6例のみ12カ月の trial が行われ, 金群は対照群および Phase 1 からひきつづき Placebo をつづけた群に比して活動性関節数は増加せず, 握力増加, 血沈改善を認めたが例数が少なく, 改善の差も大きくないので結論は出せなかった。Empire Rheumatism Council の trial での成績がこの CCC の成績よりもよいのは, 罹病期間がすべて5年未満のものが対象となっており, 多くのリウマチ学者が認めているように, 金剤が早期の RA によりよく効くということによるものであらうと説明している。

(中伊豆温泉病院 間 得之)